

一九三〇年代台湾漢文通俗小説の「場」における徐坤泉の創作の意義

黄美娥／訳・羽根次郎

一 はじめに

日本統治時代の台湾小説史研究では一般に、頼和（一八九四—一九四三）や張文環（一九〇九—一九七八）、龍瑛宗（一九一一—一九九九）、呂赫若（一九一四—一九五二）などの純文学系統の白話作家とその作品に議論が集中しがちである。しかし、全貌を理解するには、その他に文言小説や通俗小説が存在した事実や、それらと純文学白話小説との相互交渉や相互関連の関係にも注意すべきである。

それでは、かかる「文学系統の複数性」の観点より全貌を考察しなおすと、何を発見しうるのでしょうか。台湾小説史上、地元文人による最初期の文言小説においては、一九〇五年に謝

雪漁（一八七一—一九五三）が『漢文台湾日日新報』にて「陣中奇縁」を発表、その後もそれに続く作品が徐々に増え、一九二〇年代の白話小説登場以前にはすでに目を見張る数となり、白話小説勃興後も発展し続けた。内容においては通俗性や娯楽性に欠けず、任侠ものや探偵もの、怪奇もの、「言情」もの〔色恋を中心テーマとした小説〕、歴史もの、冒険ものなど各種の小説が揃っていた。このため、作品の性質においても通俗的な小説と見なしうる文言小説が存在した。こうして、文言小説と通俗小説とで重複関係や接合関係が生じることとなった。これは、『台湾日日新報』や『漢文台湾日日新報』にてお馴染みであった謝雪漁や李逸濤（一八七六—一九二二）、魏清徳（一八八六—一九六四）などの作品からもその一斑を垣間見ること

ができる。

しかし、こうした展開は、三〇年代に漢文白話通俗小説が出現した際、やっかいな問題を派生してしまった。というのも、当時の小説の「場」において、純文学／俗文学という二系統の白話／文言小説が同時に生産／消費される現象が現れたからである。前述のように、三〇年代の小説は複数の系統に分かれていたが、漢文白話通俗小説の出現はそれへの重大な変動かつ挑戦であり、文学的秩序の調整ための重要な時期を画することとなった。結局、三〇年代の漢文白話通俗小説と二〇年代以来の純文学白話小説や、その前の、あるいはそれと同時期の文言／通俗小説との間にはいかなる相互関係が存在したのであるか？小説の「場」の変化の問題を考える際、徐坤泉（一九〇七—一九五四）及びその創作が有した重要な役割と意義に筆者は注目している。これは、その長編小説『可愛的仇人』が三〇年代に大衆の人気を博し、しかも、白話漢文通俗小説がまだ誕生直後だったことで、漢文白話通俗小説家の巨匠たる地位を徐坤泉が素早く占めたことに由来する。彼が成功を収めた戦略の一つは、「不文、不語、不白（文言文でも台湾話文でも白話文でもない）」の言語と文体での執筆であった。換言すれば、徐坤泉の特殊な言葉遣いは、三〇年代言語問題が招いた小説の「場」の変化に対する彼の観察の自覚性と関係があったはずで、

だとすればその創作表現は、こうした書記言語の問題に由来する「場」の変化と結局いかなる関連性があったのであろう？徐坤泉の創作と、文言／通俗小説との間に、あるいは純文学白話小説との間に、いかなる交渉と相互作用が存在したのであろう？「不文、不語、不白」の独特な文体という問題以外に、最も重要な漢文白話通俗作家として徐坤泉の創作は、当時の文言／通俗小説や白話新文学小説の系統にいかなる刺激と影響とを及ぼしたのであろう？

このため、上述のように徐坤泉の人物と仕事にヒントを合わせることは、三〇年代の台湾漢文通俗小説の「場」や小説の発展史をより深く認識し、徐坤泉の関連作品の意義を理解するに有益となるはずである。徐坤泉に特化した研究については、台湾の学界では三十年余りの間に少なからぬ成果が蓄積されてきており、例えば、その生涯及びその文学的役割の探求^①や、日本統治時代の通俗文学開拓者として捉える議論^②、作品の主題や叙述のあり方の分析^③、作品中の通俗文化性と時代精神への肯定^④、作品目録の整理、日本語版と漢語版との比較対照、小説が人気を集めた主要原因と群衆心理の推測^⑤など、枚挙に暇ない。こうした成果も興味深いのだが、大抵の場合は作家論や作品論に偏重した研究スタイルを採っており、本論文が徐坤泉と三〇年代台湾漢文通俗小説の「場」との兼ね合いの中で論

じているのとは研究方向が異なっている。

それでは当時の台湾で最も注目された漢文白話通俗小説の作家であった徐坤泉は、一九三〇年代の漢文通俗小説の「場」において、いかなる役割を演じたのだろうか？ その創作活動は、文言／白話の言語的転換によって小説史内部の文学秩序を容容させたこと以外に、一九三〇年代の台湾通俗小説史に対していかなる価値を有し、いかなる貢献を行ったのであろう？ そして、徐坤泉の通俗小説創作へのさらなる関心と評価はいかに寄せられるべきなのだろうか？ 以下、分析を加えていきたい。

二 雅文／俗文が葛藤した

徐坤泉作品の特質と意義の再考察

本文では、徐坤泉の漢文白話通俗小説を通して、一九三〇年代台湾漢文通俗小説の「場」におけるその役割と意義を考察し、それと関連した現象が変化の中にあつた台湾小説史に与えた影響を考えてみたい。そのために、台湾文学史や小説史の現場に戻り、徐坤泉の人物そのものに迫ることが自ずと必要になる。

徐坤泉は澎湖出身、一九一八年に高雄に移り、一九二〇～二三年の間、陳錫如（一八六六—一九二八）が開いた書房「留鴻軒」に学び、「旗津吟社」の詩社活動に参加、ここで古典漢文

の基礎を身につけた。一九二七年には台北へと北上、その後は廈門鼓浪嶼の英華書院や香港九龍の拔粹書院、上海の聖ヨハネ〔約翰〕大学にて学を修めた後、フィリピンにも一時期客居した。その後まず、『台湾新民報』の海外通信記者に招聘され、一九三五年に台湾に転任、印刷局の仕事のほか、学芸部編集者も担当、各職務に柔軟に適応しつつ、原稿不足に悩む学芸欄を支えようと「可愛的仇人」を『台湾新民報』に発表した。これは、一九三一年のフィリピン滞在中に構想を温め、一九三四年冬に脱稿したものであった。徐坤泉はこれに先立ち、一九三四年九月の『台湾新民報』夕刊にて「暗礁」を発表していたが、台湾の読者の注目を浴びたのは、この「可愛的仇人」が最初であり、一九三六年二月に単行本が刊行された上に、三ヶ月以内に第三版まで出版を重ねた。一九三八年には張文環による日本語訳が刊行、漢文版も日本統治時代に少なくとも五度発行され⁶、漢文・日本語合計の出版冊数は万単位に及んだ⁷。かくも肯定的に受け入れられるなか、「可愛的仇人」の後に立て続けに書いたのが、一九三七年六月出版の「靈肉之道」であった。そして、同年四月にすでに発表済みの「暗礁」を上梓、『暗礁』と『可愛的仇人』は、上下巻の姉妹作的関係をなした⁸。

しかし、一九三七年四月の『暗礁』出版と時同じくして、四月一日に台湾島内の新聞の漢文欄が廃止された。漢文学芸欄の

編集に従事していた徐坤泉は強いストレスを抱えるようになり、『暗礁』と『靈肉之道』の整理・校正の作業を全て黄得時（一九〇九—一九九九）と呉漫沙（一九二二—二〇〇五）に委託した上で、自らは上海に向かい、一九三七年の「中日事変（日中戦争）」勃発後に台湾に戻った。当時、謝雪漁（一八七一一—一九五三）主編のベストセラー雑誌『風月報』では営業網拡大のため、営業部主任簡荷生（？—？）自らが、陳水田（一八九五—？）、詹天馬（？—？）、徐坤泉ら五人に共同出資による業務参与を要請、編集方面ではページ数増加のニーズの下、編集部主任謝雪漁がとくに徐坤泉には顧問として招聘し⁹、簡荷生らも徐坤泉に『風月報』への小説執筆を強く要請した¹⁰。そこで『風月報』はまず第四八号にて予告宣伝を行い、謝雪漁は徐坤泉を人気の「新派文芸家」と持ち上げた¹¹。『台湾新民報』を離れた徐坤泉は『風月報』第五〇号から編集業務に正式に参加し、それは第七七号まで続いた。この時期の徐坤泉は主な小説として、「新孟母」を、そしてジャーナリズムの散文文体で歴史小説的な「阮玲玉哀史」を発表していた。その後の創作も限界はあったにせよ、戦時中も変わらず高い人気を保ち続けた徐坤泉は、「異色」の台湾文学者と評せられるのである¹²。

この異色の作家につき、王詩琅（一九〇八—一九八四）はこう評した。

徐坤泉は、『可愛的仇人』や『靈肉之道』などの長編連載小説を立て続けに発表、一夜にして名を成し、人力車の車夫や旅館のメイドもこうした作品を好んで読んだ。また、日本時代には日刊新聞『台湾新民報』学芸欄（副刊）の編集者となり、台湾新文学運動と密に接し、関連方面での友人もかなりの数に上った。ただ、運動自体への参与は一貫してなかった。これは台湾文学界の一大怪事ともいえる。¹³

王詩琅の徐坤泉評には大体二つの方向性がある。まず、徐坤泉と新文学運動の展開には大きな関係が見られぬこと、次に徐坤泉の小説には親近感を覚えさせる庶民的（democratization）な特質が存在することである。

また、『可愛的仇人』と『靈肉之道』の出版・校正を手伝った黄得時は、八〇年代に徐坤泉の小説をこう論評した。

この二篇の小説は純文学とは言えぬ大衆小説であるが、台湾の伝統的な家庭生活と大衆心理を熟知しているばかりか、流麗な筆鋒も相俟って、読者の好評を博した。¹⁴

黄得時は徐坤泉の小説を人気のある「大衆小説」と考え、純文

学とは本質的に異なるとした。林衡道（一九一五—一九九七）も「徐坤泉其人其事」にて同様に、読者という集団の問題に注目しつつも、フランス文学社会学派の独特な観点を引いて、読者の消費量を文学史上の評価とする意義を指摘し、徐坤泉及びその作品の重要性と影響力を認めた¹⁵⁾。

以上、徐坤泉の文学表現とその定位に関する見方の多様性を明らかにしてきた。その多様性の原因としては、純文学と俗文学の両端を兼備した徐坤泉の創作には曖昧かつ豊富な位置づけができることが関わっている。ここで、最も注目を集めた『可憐的仇人』を使って具体的な各現象につき議論したい。この作品の日本語訳を当時進んで引き受けた張文環（一九〇九—一九七八）は、「中文版が一举に三刷りまで出版されたことは、台湾の文学書出版に非常に得難い成果を残した¹⁶⁾」として以下のように述べている。

物語の中心人物である秋琴と志中の恋愛は精神的なものに終始し、最後まで結ばれなかった深い感情とその素朴さは、まさしく本書の面白みの中心である。また、台湾の封建性的一面を巧みに描いたことも、訳者が我も忘れて翻訳し続けた原因である。¹⁷⁾

張文環の評価は明らかに高く、作品の味わい深さを生き生きと伝えている。また、一九三五年の中国語版『可憐的仇人』に序や題字を書いた書き手の見方も様々であった。まず以下が題字の内容である。

林獻堂（二八八一—一九五六）：「東甯照妖鏡（東甯の照妖鏡）」

薩鎮冰（二八五九—一九五二）：「酒後茶餘（酒後の茶餘）」

羅秀惠（二八六五—一九四二）：「可憐的環境、愛情的神聖、

社會人胡不醒（可憐な環境に愛情の神聖さ、社会はこれに覚醒せずにいられようか）」

また、曹秋圃（一八九五—一九九三）は序にこう記した。

文章には命が宿したのもあれば、そうでないものもある。世間に関心を持ち時代を書き写した作品が生き生きとしたものであれば、その命は伸長していくことが分かる。……徐坤泉君の傑作『可憐的仇人』は台湾を背景とし、その描写には生き生きと余すところがない。読者諸氏にはまず、その命の

所在をご覧頂きたい。¹⁸⁾

これらの評価のうち、「酒後の茶餘」が小説の娯楽性に明らかに触れている以外は皆、その社会教化的機能を称えていた¹⁹⁾。

さらに中国には、『可愛的仇人』が単なる出色の長編小説ではなく、「現代新小説の精華が表れ、台湾の中等教育以上の学校で文芸面での参考文章とすべき²⁰⁾」と考えた丁誦清（？―？）がいた。また、フィリピン『新聞日報』の葉渚沂（？―？）が小説創作論よりその成功を論じたり、「雞籠生」（陳炳煌・一九〇三―二〇〇〇）が、何度読んでも飽きない満足感をイラストレーター立場から表明していた。作者である徐坤泉本人は自序で、自己の創作経験をトルストイやハイネ、シェリ―、左思、茅盾と結びつけたうえで、本作執筆の心境をこう紹介した。

台湾なる環境で「大衆化」と見なせる小説を書き上げるのは本当に極めて難しい。年配の方々は古文を、中年は台湾語文を、青年の同志は白話を好む。いわゆる「郷土文学」が、ときには台湾という郷土の音でそのまま描写を行うことにもなる以上、この『可愛的仇人』は「不文、不語、不白」の字句で形作られており、その目的は広範な読者諸氏にご覧頂く

ことにある。したがって、俗字俗文が文中に多々見られようが、読者諸君にはくれぐれもご理解を頂きたい。²¹⁾

ここで理解しうるのは、当時の台湾文壇で盛んだった「文芸大衆化」や「郷土文学」の運動に強い関心を持った徐坤泉は小説執筆時に、それに応じた創作実践を求めたことであり、また、「不文、不語、不白」の特殊な文体と多くの俗字俗文を用いたのも、郷土文学の「大衆化」に沿った作品を書くためであったということである。

以上、『可愛的仇人』の出版背景及び題辞や序の内容より分かるのは、同時代の人は薩鎮冰を除き、『可愛的仇人』の「通俗性」に敏感ではなく、中国や台湾での「新小説」や「長編小説」の進展過程より評価が下されたりしたことである。徐坤泉自身も本文執筆の際、台湾文学史の重要な文芸思潮と相呼応させつつ、「郷土文学」や「文芸大衆化」の面で実践的な成功を収めようと考えていた。『可愛的仇人』を通俗的な「大衆小説」とのみ捉えれば、この小説と新文学小説との密接な関係を間違いない見落とすことになる。「大衆化小説」の内に収まった作品として大衆の間に席卷したことでこの小説は、純文学に非ずと黄得時が評価する「大衆小説」となった。これは三年の構想の後に台湾島内外の読者からの愛顧を受けた徐坤泉にとり思い

もよらなかつたはずである。

それでは、徐坤泉の小説における純／俗両文学のもつれをいかに顧みるべきなのであろう？　そして、作品に内包される両者の交錯の意味をどう緻密に考えるべきなのであろう？　筆者の考えでは、純／俗双方の文学系統や台湾文学の「場」の問題から考察と相互比較を行えば、徐坤泉の人物と作品の意義や価値がよりトータルに把握しえよう。関連する問題の複雑さと論述の困難さを踏まえ、本論文ではまず、一九三〇年代台湾漢文通俗小説の「場」との関係性において論じることと重点を置くこととする。

三 「大衆化小説」から「大衆小説」まで

黄得時が、徐坤泉の小説を通俗的「大衆小説」であり純文学に非ずとしたのは上述の通りだが²²、一九三〇年代台湾文学思潮で大衆重視された「大衆化」なる重要テーマへの呼応を追究し、郷土の言葉で表現し、『台湾新民報』に小説を掲載した作家徐坤泉が新文学運動と無関係であったと王詩琅ですら考えるのはなぜか？　しかも、実践面で「大衆化」を追究した『可愛的仇人』に、一九三〇年代の台湾新文学への貢献が見出せぬのはなぜか？

この問題への整理はどう始めるべきか？「可愛的仇人」が当初、日刊紙『台湾新民報』に連載されたことに鑑み、イラストを当時担当していた「雞籠生」はこう語る。

『可愛的仇人』は……『台湾新民報』で半年の長きにわたり連載、毎回発表のたびに皆が先を争って読んだ。……その描写は過不足なく、筆致も流麗明快で、イラストを入れる必要が無かった。²³

「可愛的仇人」は新聞掲載の時点で読者を魅了していた。雞籠生の言葉には謙遜の意もあろうが、小説の成功の鍵が作品の内容自体にその実あることは雞籠生も指摘しており、これこそ、「外部」での宣伝戦略や商品イメージの要素以上に大衆の人気を得た根源ともなった。

小説の「内部」より、徐坤泉の大衆化／大衆小説の変容をいかに探求すべきかにつき、筆者はこう認識している。まず、徐坤泉の「大衆化小説」と「大衆小説」が「可愛的仇人」で同時に達成されたとすれば、それに先立ち発表されその前篇とみなされた「暗礁」との間に、いかなる創作表現上の差異が存在するのであろう？　その差異こそ、「暗礁」がすぐには「大衆小説」として人気を得られなかった原因なのではないか？　次に、

大衆の共感を呼んだ『可憐的仇人』はその後の『靈肉之道』と、小説の書き方や趣旨において、いかなる共通性や連続性があったのであろうか？ これこそ「大衆小説」なる賛辞を手放さぬための叙述上のテクニクなのではなからうか？ かかる二方面を比較対照することは、「大衆化／大衆」小説の叙述戦略の變化や双方の臨界点と境界を発見するのに有利なはずである。

まず、徐坤泉は「可憐的仇人」執筆時、「大衆化」小説を書くことをその動機としていた。読者大衆には老いも若きもいることに注目した徐坤泉は²⁴⁾、「不文、不語、不白」の文体と郷土の俗字俗語での執筆を思いついた。しかし、言語／文の問題がなぜ大衆を集める有効な戦略となりえたのか？ 徐坤泉は当時、読者市場の分布に応じた戦略を採ったが、これは一九三〇年代台湾の言語分布の複雑性と密接に関わっていた。言語範疇としての「漢文」については、日本統治期より今まで、台湾の読者が受け入れた文語言語には、文言文・北京白話文・台湾話文が含まれ、郷土文学と台湾話文運動がまさに沸騰中の一九三〇年代に台湾新民報社に勤めていた徐坤泉が当時の状況を知らぬはずは当然なく、だからこそ最終的には、日本統治期を通じて蓄積された多種の文語言語を統合したものを自らの創作文体としたのである。「不文、不語、不白」は「文言かつ台湾話文かつ白話」の結合文体にはかならなかった。さもなくば、

各種文語の使用者と支持者にひとしく訴えることはできなかった。そして、各年齢層の読書に熱心に訴えることで事実上、広範な読者の人気を博すことができた。徐坤泉が試みた「大衆化」の叙述とは事実上、「大衆小説」を形作る重要な根底となったのである。

しかし、言語の混住現象は結局いかなる様子だったのか？ もしも徐坤泉が重視する「不文、不語、不白」の文体と、郷土言語の使用現象の点より「暗礁」執筆の実践を観察すると、関連現象が実はとうに現れていることを不思議に思うかもしれない。「暗礁」は基本的には白話文で書かれたが、文言文あるいは文言文と白話文の混合文、さらには台湾の郷土言語までが出現したりもした²⁵⁾。換言すれば、「暗礁」自体は文体と叙述の問題において、「不文、不語、不白」の文体や郷土言語を使ったり、新／旧様々な叙述方法を同時に使ったのに、なぜ「可憐的仇人」と同様の評価を読者より得られなかったのだろうか？ 全体的に言えば「暗礁」は、行文の流暢さと容易さの点で『可憐的仇人』には全く及ばなかった。それに、『可憐的仇人』の言葉遣いは「暗礁」よりさらに白話的であった。郷土言語や俗字俗語の実際の使用量も、『可憐的仇人』は「暗礁」よりはるかに多かった。「暗礁」は議論が多い行文は語気が硬く、しかも議論が多いといっても、対話文や内心の独白は従来より大き

く増えた。これは両者を比較することで見出しうる概略である。こうして、「暗礁」の後に『可愛的仇人』執筆に従事した徐坤泉が文章や文体に行った修正や調整につき、説明が可能となるのである。

以上、「暗礁」と『可愛的仇人』との叙述文体の実践上の異同を明らかにしたが、これによって、『可愛的仇人』が「大衆化小説」から「大衆小説」へ変容したことがはっきりと理解しうるのだろうか？ その答えは当然否定的なものとなる。文語言語の問題に限ると、「暗礁」と『可愛的仇人』には類似性があるからには、こうしたことが、『可愛的仇人』が最終的に「大衆小説」となった唯一の原因だとは説明しきれないのである。

さて、『可愛的仇人』の姉妹作たる前篇「暗礁」は結局なぜ『可愛的仇人』に、さらには後の『靈肉之道』に及ばなかったのか？ まず、「暗礁」の内容から言うと、その物語やあらすじは、例えば飲んだくれの悪習や女性の乱れた風紀、娼婦や下女の苦しい生活環境、自由恋愛の挫折など、台湾現地の社会環境や封建思想の問題を写實的に描いたのみならず、故郷を遠く離れた東京や上海での冒險的な留学経験、さらに台湾政治や日中戦争（日華戦争）、上海事変、アジア民族大同盟へのコメントも書かれていた。次に、小説の空間設定から言うと、台湾高

雄の西子湾や寿山、基隆、そして中国福州や呉淞江、上海、また日本の東京や南洋などを含んでいた。以上の多元的で内容豊富な小説「暗礁」の方向性を『可愛的仇人』と比べれば、類似点が多いのに、なぜ『可愛的仇人』のように、発表後たちまち一世を風靡、とはならなかったのであろう？

この問題の鍵を説明するには、張文環の以下の言葉を参照すべきだろう。

物語の中心人物である秋琴と志中の恋愛は精神的なものに終始し、最後まで結ばれなかった深い感情とその素朴さは、まさしく本書の面白みの中心である。

この見方によれば、『可愛的仇人』は新境地を開いたラブストーリーが大衆の心の琴線に触れ、大流行を引き起こしたことになる。しかし、『可愛的仇人』の前篇かつ姉妹作たる「暗礁」はラブストーリーではないということになるのか？ 事実上、「暗礁」は確かに、志中と秋琴の曖昧な愛情を扱い、さらには「恋愛」の意義を少なからず議論しており、これが小説全篇を貫く主旨であるはずだった。しかし、『可愛的仇人』に比べ紙幅の少ない「暗礁」が扱ったテーマは過剰に多く、九分された章節（山上にて呻吟す；樓上にて沈思す；馱頭にて握別し、志

中上京苦学す；月下の老人；新婚の情、依依として捨てず；淑華回家し、見景生情；半瀟園にて遊玩す；上海の野雞；上海事変）の中で様々な空間や風景が描かれ、台湾問題や日中関係の問題にも言及があった。とりわけ、東京や上海で志中が過ごした修学経験の描写の割合は高かった。それゆえ、「暗礁」の重要な焦点が「恋愛」であっても、「言情」の描写は多くなく、複雑かつ錯綜した物語の中で「言情」という主題やムードが後景に退いていることに気づいてしまう。小説のテーマを述べた第九七頁にもこうある。

哀れ志中、果たして『読書』無き運命は、至る所『暗礁』の待ち伏せを乗り越えられず、彼の行く手を阻んでいる。ああ、人生とはまさに何とも知れぬ『運命』が後に続くものなのだ。ここで分かるのは、小説全体の重点が「運命」を目立たせることにあること、そして「暗礁」なる語が意味しているのは実は人生における各種の困難な挑戦であるということである。

このため、「暗礁」の描写を踏まえれば、『可憐的仇人』以降の小説では趣旨が調整され、文字数の増加もあったことで、愛情描写の比重が大きくなり、「言情」小説の範疇に自然とより相応しいものとなったと気づける。そして、『可憐的仇人』で

は、「愛情」の定義や論述、金銭と結婚、恋愛問題の議論、肉体と貞操との弁証法など、徐坤泉が「恋愛」にかなりの叙述と分析を行っていることが見出せるのであり、さらには小説全体で言及のある配偶者に死なれた男女の感情や心の安定の問題も読み取れるのである。徐坤泉は、愛の美しさだけでなく、その神聖さをも打ち出し、その後は登場人物の愛情のあり方をめぐる世代差の問題を通して、男女双方が貞操を貫くべき道徳性を指摘しつつ（これは本来、伝統的文人が重んじることであった）、「魂」と「肉体」の弁証法的張力（これは中青年層の世代の自由恋愛に対するモダニティのイメージであり体験であった）をも描き出した。その結果、『可憐的仇人』は金銭と愛情のもつれた関係の衝突以外に、『暗礁』と比べ「性」のイメージ描写が大幅に増えた。この流れは『靈肉之道』において開花し、さらなる叙述が加えられていく。

徐坤泉は『靈肉之道・自序』で、執筆の目的が以下の点を暴くことにあると単刀直入に述べている。

『金銭』と『肉欲』の社会は常に互いを追い回しており、この二種の力のために多くの社会的罪悪が発生してしまう。……小説『靈肉之道』は筆者が近年感じてきた社会的な風潮を反映させたものであり、粗野な筆法で台湾現代社会の苦悶

を描写した。……人生は夢だ……人生の旅路は尽きることなく長いのだ！」⁽⁸⁾

徐坤泉が強調しなかったのは、金銭と肉欲の社会に身を置く台湾人が靈魂と肉体の道に彷徨する苦悶である。小説は表向きは情、愛、性の描写に意を払うが、実際にはより深い意味が含まれている。それは愛情や肉欲から「人生」を見ることであり、これこそ『靈肉之道』の真の主旨なのであった。『暗礁』から『靈肉之道』までの小説三篇にて徐坤泉は、「言情」小説の形で「人生」の真諦を述べようとした。もっとも『暗礁』での「言情」の出来栄えがいまひとつであったため、この作品は発表当初、大衆の注目を得られなかった。ここでもしも『靈肉之道・自序』での以下の登場人物紹介を振り返れば、徐坤泉がなぜ愛情の錯綜ともつれを強調しなかったのがより明白になる。

国魂は資本家の子弟であり、ヨハネは宗教家の子弟、アランは薄命の哀れな小娘、三人ともそれぞれの運命を背負っていた。とりわけ時代に反逆した女である梅子は抜け出しえぬ人生の苦痛の中にあつた。⁽⁹⁾

小説が描いたのは「愛情」の類ではあったが、それは実際には

「人情」と「世情」の投影と反映だったのであり、人生と愛情とは徐坤泉の小説の表裏を為す両面なのであった。

こうしてみると、誰もが接触し、感じとり、実践しうるテーマである個人の情愛と人生の運命は、何よりも具体的に切実なものとなる。こうした文学叙述は実は現実生活と融け合っているため、大衆の社会的生活に参与し、その心に対応した創作となりうる。「大衆化」した文学であると同時に「大衆を化する」文学、徐坤泉の作品は大衆に身を投じ、大衆とともに歩んだがために、多数の売り上げを誇る「大衆小説」となりえた。当然売上以外にも、言語論や文体論から内容やテーマの表現まで「暗礁」の概況と比較することで明確にできるのはまさしく、「可愛的仇人」あるいは『靈肉之道』にて人生の問題が語られるとき、小説全体のあらずじや叙述が情愛と男女心理の探求を主としていることである。これも大衆化小説が最終的に「大衆小説」となるもう一つの原因となった。

四 徐坤泉と三〇年代台湾漢文通俗小説の

「場」の交錯と接合

愛情叙述から人生の問題に対応せんとした徐坤泉の試みから、「大衆化小説」の「大衆小説」への変容を大まかに理解した後、

再び分析すべきは徐坤泉が「言情」の形で「人生」描写を行うことを考えついた理由である。「言情」小説の技巧に何か突出した点があったのか？なぜ不落の人気を見事に集められたのであろう？さらに、「暗礁」、「可愛的仇人」、「靈肉之道」、「新孟母」、「阮玲玉哀史」などの作品はその発表の「場」として、『台湾新民報』、『風月報』、『南方』などの「大新聞」と「小新聞」を同時に占めたが、この現象にはいかなる意義があったのか？そして、徐坤泉自身はなぜ『台湾新民報』の編集者の後に、『風月報』での仕事の依頼を受けることができたのか？

『台湾新民報』から『風月報』への転進がマスメディア内部にもたらした関係について以下述べたい。徐坤泉は大新聞と小新聞の双方に、作品の掲載や転職通知の掲載ができた。これは、一九三〇年代台湾文学の純／俗両系統の文学の間に、対立や断裂含みのものが全く存在しなかったことと、小説なる「場」での系統の複数性には、流動性と横断性という可能性が相互に存在したことを明らかにしている。徐坤泉とその作品は自由な横断性をなぜ得られたのであろう？そして複数の系統が合流するための能動性が促されたのか？徐坤泉が『風月報』に転じた背景と理由を振り返るに、『風月報』経営者の招聘に応じたためと徐自身が述べている。執筆を了承した徐坤泉はさらに紙

上にて、「可愛的仇人」や「靈肉之道」への変わらぬ支持と、新作「新孟母」への応援を読者に呼びかけた²⁸。簡荷生らは『台湾新民報』と『風月報』が完全に異なる「場」であるとは全く意識しておらず、徐坤泉の作品が『風月報』に載ることを唐突とすら考えていなかった。徐坤泉にとり、従来の『台湾新民報』における徐坤泉の作品の読者と『風月報』におけるそうした読者は一体化していた。それゆえ「新孟母」への変わらぬ関心を読者に求めたのである。

『台湾新民報』と『風月報』はなぜ徐坤泉の小説の掲載を引き受けたのだろうか？徐坤泉は、両紙の特徴の相違のせいで従来読者の愛読者が失われることはなく、作者としての個人的魅力によって変わらぬ愛顧を受けられるはずと認識していた。では『台湾新民報』と『風月報』が共有しうる空間はどこに構築しえたのか？元來資金に恵まれなかった『台湾新民報』は一九三二年四月一五日の日刊化以後、当局側の日系新聞との競争のため経営圧力が徐々に生まれ、発行継続の経費を調達するには広告増加しかなく、紙面は一層商業化を進めていった²⁹。新聞の性質的質的变化のみならず、「学芸欄」の文学作品にしてもそうで、これにつき林克夫はこう注意した。

惜しむらくは、内容が全て家庭制度や恋愛問題に向かってし

まい、無産大衆に関する作品を生み出せず、……現代の当局の政策は、……無産階級大衆文化のイデオロギーに少しでも関われば、それを危険思想と見なしている。²⁰⁾

換言すれば、徐坤泉が一九三四年九月に「暗礁」を投稿した時期の『台湾新民報』はすでに、「学芸欄」も含め全体が通俗化に向かっていたのである。

『台湾新民報』の通俗化現象は、徐坤泉の作品が後に、娯樂的かつ通俗的な『風月報』に滞りなく転身した原因を説明するのに役立つ。しかし、『風月報』にある徐坤泉の紹介文を眺めるや、『風月報』の編集者や経営者にとり徐坤泉の作品は「新文学」小説に属していたことが分かるのであり、徐坤泉の参入と謝雪漁の「旧文学」が揃ってこそ「新旧両翼が並び立つ²¹⁾」ことになるのであった。このほか、上述の『風月報』第48号では謝雪漁がまず『風月報』に加わった徐坤泉を「新派文芸家」とする記事が予め掲載された²²⁾。それゆえ、ここに潜んだパラドックスとは、『風月報』という「場」では、徐坤泉の『風月報』参加の理由が「新派」にあって「通俗」性にはなかったということなのである。とすれば、以下のことが間接的に説明されるだろう。第一に、『台湾新民報』と『風月報』には、新派小説の創作上近似性が存在していたため、簡荷生や謝雪漁などは両

紙の間に存在する衝突や不一致を意識していなかった。第二にもしも徐坤泉が、『台湾新民報』と『風月報』という大／小二種の新聞の「場」を横断しえた理由が通俗性のためでは全くなく、より多くの読者を獲得したい『風月報』が採った新旧文学兼備という経営戦略のためであれば、一九三〇年代の台湾文学の場で、白話／文言や新／旧言語の相違は純／俗文学の相違よりはるかに重視されたことになる。

以上よりさらにこう問うべきだろう。第一に、『台湾新民報』と『風月報』に通俗性の「場」という共通点がある以上、徐坤泉には『風月報』の新派作家として、『台湾新民報』時代と何かしらの相違はあったのか？ 第二に、『風月報』経営者や編集主任謝雪漁が徐坤泉とその作品のうちなぜ、「旧文学」とは区別される「新派」作家という記号に注目したのか？ つまり、関心を持たれたのは白話文という文体であり、それに由来する「通俗性」や創作傾向を無関係なものとして排斥したりせず、高い評価を与えることすらできた。これは、「暗礁」や「可愛的仇人」、「靈肉之道」などに、一九三〇年代以前の漢文通俗小説の場との間に意思疎通や通底が可能な箇所があり、それが以後の共存共栄を導いたからではないだろうか？

第一の問題につき、『風月報』の「新孟母」の宣伝文句よりその大体が理解できる。紙面で指摘されたのは、「新孟母」は

「純粋な家庭社会が喜怒哀楽しうる新小説であり、新女性が旧家庭社会の仕打ちを受ける惨史を描いて」おり、さらに「台湾社会の男女青年が本当に読まざるを得ない小説であり、旧家庭や旧社会に大爆弾を投じ、新女性に重大な警告をなし、……旧社会の照魔鏡といえる³³⁾」とのことであった。つまり、『風月報』が想定する読者は明らかに青年男女であり、この小説は家庭と恋愛の問題を描写した小説であった。「新孟母」の宣伝文句が読者の目に馴染みやすかったのは、『台湾新民報』の小説につき林克夫が指摘した創作上の特徴（家庭制度や恋愛問題に傾倒し、無産大衆に関する作品を生産できない）なり、林献堂が『可憐的仇人』が題辞に書いた「東寧照妖鏡」なり、全て対応した箇所を見つけたからである。すなわち、「新孟母」と『可憐的仇人』とはテーマあるいは創作目的において、連続性と共通点とが実際に存在したわけなのである。

上述の内容よりさらに強調したいのは、徐坤泉とその作品を経由して、台湾新文学と一九三〇年代台湾漢文通俗小説の「場」が接続され、両者の相互交錯と相互結合の現象が発生したばかりか、上述の二紙において通俗的な白話漢文小説に連続的発展の可能性が出現したことである。とりわけ、一九三七年六月一日の『台湾新民報』漢文欄全廃の後、日本語小説の天下となり、徐坤泉は『風月報』に転進したのだが、これは徐坤泉

個人の通俗小説の創作生命の延長を意味するのみならず、『台湾新民報』の漢文小説の別の「場」での展開という文学史的意義のある意味有したことにもなる³⁴⁾。このため、三〇年代台湾漢文小説の「場」というよりマクロな視座から徐坤泉の特殊な創作形態を考察すれば、この作家の重要性が一層理解しうるのである。

徐坤泉における純文学から俗文学への横断の問題がまず第一に、一九三〇年代台湾の純／俗文学間の相互作用の空間への再評価に関わってくるならば、純／俗の議論がさらに新／旧両文学の問題にも関連してくる以上、第二の問題は明らかに一層複雑となる。この問題を説明する前に、まず以下の事実に触れておく。まず上述のように、雑誌『風月』の刷新拡大に参与するよう徐坤泉が招聘を受けたことは謝雪漁の承諾なしにはできないことだった。次に、徐坤泉は第五〇期より『風月報』の編集に協力するようになるが、その「巻頭語」で『風月報』の前身『風月』によくあった女給や女形の紹介記事の掲載中止を表明した。しかし、これは短期間に実現可能なものではなく³⁵⁾、この声明は基本的に、新派と旧派の文学的思惟と創作の方向に実は齟齬があることを明らかにしてしまった。改革を追求する徐坤泉は、『風月報』第五九期「巻頭語」にて、新『風月報』はもはや女給や女形のグラビアではないと明確に宣言し、第六〇

期ではさらに各新聞及び『風月報』詩壇への批判を掲載、旧体詩の多くは風流に溺れ、正義の称揚に没頭したものととして、生活に根ざす小品文を強く提唱した³⁶。

以上の事実は大変意味深長である。『風月報』編集顧問を担当した後の徐坤泉は、旧派の出版物や『風月報』詩壇に不満があったが（この不満は実際には旧派主幹の謝雪漁に向けたものであった）、上述のように、『風月報』の編集担当となれたからこそ謝雪漁の要請と許可によるものであった。『台湾新民報』の漢文白話小説を『風月報』にて発表したことは、純／俗新聞の「場」あるいは文学の系統間の相互作用や交錯、結合に役立ったものの、結局は新／旧二種の文学系統の違いのために相互排斥的な緊張関係が生まれてしまった。こうしてみると、さらに興味深いのは、当初旧派に属した謝雪漁はなぜ、新派の徐坤泉及びその作品が『風月報』という「場」に入ってくることに反対しなかったのかということである。

つまり、徐坤泉のテクストのどこに謝雪漁は興味を感じ、共鳴すら覚えたのか？ 三〇年代の作家には旧派／新派の別がまだ存在したので、謝雪漁は文語／白話という言語区分の外部で、受け入れ可能な空間を見つけられた。このほか、林獻堂や羅秀惠、曹秋圃など『可愛的仇人』の序や題を書いた旧派の人物は、徐坤泉の小説に少なからぬ旧派人士が必然的に吸い寄せられる

ことを知っていた。それでは、徐坤泉の小説と旧派文学にはいかなる関係性があったのであろう？

まず上述のように、『暗礁』と『可愛的仇人』、『靈肉之道』が「大衆化小説」から「大衆小説」に転身可能な主要原因を筆者が察するに、老年／中年／青年の三世代の読者を考慮した「不文、不語、不白」なる特殊な書記言語戦略を追求したほかに、「言情」からの「人生」の議論という、新たな叙述法の開拓のための創作戦略を採ったことが挙げられよう。いきいきとした感覚を求めた徐坤泉は創作時に、「言情」を基調とした創作活動を求め、「性」の肉感が強く際立ち、離郷の「冒険」という観点から人生の起伏を照らし出そうとした作品は注目を集めることに成功した。ただ、「言情」や「性欲」、「人生冒険」の主旨を重視するや、直ちに多くの読者（筆者が強調する旧派人士を含む）を獲得できたのはなぜか？ 無視し得ぬのは、徐坤泉の作品における、当時の台湾社会のムードや時代的な重要テーマ、伝統的な叙述方法の微妙な結合であり、これは『可愛的仇人』や『靈肉之道』の描写より理解できよう。一九二〇年代より、『台湾民報』や『台湾新民報』そして若干の台湾新文学者や新文化人が積極的に展開した自由恋愛の啓蒙的論述や、一九三〇年代台湾社会のモダンなムード、台湾文学界の「大衆文芸」、郷土文学、台湾話文運動の文芸思潮などが、何がしか

の形式や言説、精神を經由して徐坤泉の名作の中に入り込んだ。だからこそ、徐坤泉の叙述の方向性は、旧派人士を含む衆人の注目を集めざるをえなかったのである。

しかし、小説の内容と時代のムードとの緊密な関連性以外に、徐坤泉の作品と早期台湾文言小説との関連性や、一九三〇年代台湾文言／通俗小説で流行したテーマと叙述の趨勢との関連性もまた、旧派人士が受け入れた理由であった。つまり、「言情」によって「人生」を叙述する方法において、一九〇五年に台湾本土文言／通俗小説が出現して以降、「言情」は重要な類型として謝雪漁や李逸濤（一八七六一一九二二）、白玉簪（？―一九一八）らがそれに着手し、一九三〇年代に至っても、『台湾日日新報』や『台南新報』、『昭和新聞』、『新高新報』、『孔教報』、『三六九小報』、『風月』、『風月報』などを含む多くの新聞で「言情」作品を依然目にしえた。それでは、謝雪漁に評価された徐坤泉の『可愛的仇人』や『靈肉之道』と、それまでの台湾「言情」文言／通俗小説とではいかなる違いがあったのだろうか？

もしも徐坤泉の発表時期が割合接近した『三六九小報』より見れば、その中の「言情」作品は非常に豊富で²⁷、しかも一部分の創作は、中国伝統の才子佳人の出会い、恋愛、結合あるいは別離などの物語に偏っていた。しかしそれから徐々に、台湾

現地の妓女や女給のままならぬ運命への関心に転向していき、しかも自由恋愛や男女双方の貞操の問題に強い興味を示し出したのである。例えば一九三〇年九月創刊号から連載四七回に及んだ恤紅生（譚瑞貞）の小説「蝶夢痕」は、台湾の女性の結婚や恋愛、貞操、「靈肉」の問題に思索を深めている。これに借りて筆者が説明したいこととして、台湾現地の視座より出発し、中国あるいは西洋世界より台湾現地の女性の環境への凝視に転じ、そして「靈肉」や情愛への想いを弁証法的にとらえようとする類の創作傾向は、徐坤泉の作品が現れる前の台湾文言／通俗小説の「場」においてまさに発酵しようとしていたがゆえに、一旦徐坤泉が「言情」を小説執筆の主軸として選び、性と愛の葛藤を重要な技法として描いた時、疑いなくただちに、文言／通俗小説を慣性的に読む読者の注意を惹きつけることができた。さらに言えば、作品の主役は特殊な身分を持つ女形や女給ではなく、一般家庭の平凡な女性であり、しかも『可愛的仇人』での主役秋琴はやはり漢文教育を受容し、古典詩歌を熱愛した女性であった。こうして旧派人士にはさらなる親近性が生まれていったのである。

次に、人生の起伏に富んだ「冒険」性を描く叙述法は異域や異空間と接続する形で、初期の台湾探偵推理小説や、帝国主義による海外植民地開拓の話の中にもあった²⁸。その後、日に高

まる旅行人気と個人主義への強調によって、冒険精神はさらに激賞推進され、海洋での漂流や孤島での生活、各地へのグラン・ドツアー（原文・壮遊）といったスリル溢れる冒険物語が大正時代以降、各種通俗小説の中に頻りに現われるようになり、通俗小説は、娯楽性を強め審美趣味を刺激するための絶妙な叙事法へと知らぬ間になっていった。同時代の人が頗る愛好したのもそれゆえである。徐坤泉の小説でも、主人公が台湾に行くことがよく述べられている以外に、たとえば留学やビジネス、新婚旅行、失恋の慰めなど様々な目的で上海や福建、東京、南洋、シンガポールなど世界各地に向かったり、さらには『靈肉之道』の国魂のように海上の孤島に漂流したりと、冒険の驚きが文中に溢れるようになった。くわえて徐坤泉は、初期の文言／通俗小説の冒険物語に類出した虚構の空間とは異なる実在の空間を描き、さらには地理上の冒険が日常社会の人間性の冒険に転ずることもあった。それゆえ波乱に溢れた物語は冒険物語に慣れた旧文人にとっても、ひとたび読めば親近感を覚えさせ、読書熱を誘いやすかったのである。

以上、徐坤泉の「言情」や「冒険」の叙述の方向性につき指摘してきたが、その実これは、明治以来の台湾文言／通俗小説の創作方向と合致するところがあり、この両者は文言／通俗小説において見慣れたテーマやモデルでもあった。鄭坤五が一九

四〇年代初期に完成させた『鯤島逸史』の序に「現代の小説は通観するに、『言情』でなければ『冒険』であり、さもなくば宣伝や迷信の類に属する」とあるのによれば、たとえ四〇年代初期になっても当時の小説の読者や創作者は「言情」や「冒険」、奇妙な物語を極めて好んでいた。つまり、三〇年代中期に徐坤泉が「言情」や「冒険」から会得していった創作テクニクは実のところ、旧派人士の読書上の趣味を非常に正確におさえていたのである。さらに付言すれば、「言情」と「冒険」のほかに徐坤泉が最も激賞を受けた『可愛的仇人』は苦惱が全篇通して顕わなムードの中、主人公の男性志中に仮面男の役割があてがわれ、每晚黒い影となって出現し、秋琴の経済的困難を度々救い、現場に奇妙な手紙を一通残すのだが、こうして小説に幾許かの緊張と不安がつけ加えられ、最終的には物語の展開と登場人物による推理と判断にしたがい、とうとう双方の子女が志中と秋琴との関係に気づいてしまうことになる。物語展開のかかるデザインは当時人気を博していた探偵小説の書き方を明らかに真似ているが、その実、「探偵・推理」という、読書をより楽しませてくれるような吸引力にすぐれた妙法は、長きにわたり、文言／通俗小説の中にもよく見られた創作傾向であり、だからこそ徐坤泉もこれを踏襲したのであろう。

以上をまとめると、一九三〇年代台湾漢文通俗小説の「場」

とそれに先んじた文言／通俗小説の流行を説明することを通じて、徐坤泉なる新人が一躍人気を博しえたことと、「暗礁」後の作品「可愛的仇人」の驚くべき業績が理解可能となる。そこにあった原因としてはもとより、徐坤泉には、「言情」や「冒險」、「探偵」といった創作上の不思議な要素や特殊な法則を発見しうる自覚的な創造力があつたことが挙げられる。これは大衆の好みに合った結果、人気を集めたものの、実は従来の文言／通俗小説の流れにおいて流行中であつた「言情」や「冒險」、「探偵」という技法の継承と集大成を行つた叙述に過ぎず、だからこそ旧式小説を偏愛する多くの旧派人士の好むところとなつたのである。徐坤泉は新文学と白話小説がともに重んじた社会写真主義の方法を引き継ぎ、さらに台湾の封建社会の問題に焦点を集めることに全力を注ぎ、郷土の言語でそれを表現した。そのとき、その作品が引き寄せた関心と魅力は自然に、純／俗文語／白話、新／旧といった流れのなかの読者群をも同時に吸引寄せ、徐坤泉は真の意味での大衆小説家となつていたのである。

五 むすび

日本統治時代の台湾小説史を振り返るに、徐坤泉は極めて特

別な人物といふべきである。これはその漢文小説が日本語訳されたとか、映像化されたとかいうことだけでなく、売れ行きが実際に良かったため注目を集めたということでもある。徐坤泉は純／俗、文言／白話、新／旧といった文学の系統の間を漂い、「不文、不語、不白」の叙述戦略をとつた。筆者はこれに好奇心を覚える。このため本文は、その人物と作品の価値をトータルに理解するために、細かいテキスト分析を研究方法としては採用しなかつた。逆に試みたのは、一九三〇年代の台湾漢文通俗小説の「場」の中に徐坤泉を置き、補任は大衆化小説を本来執筆するつもりであつたのに、後人の眼中には大衆小説となつてしまつた点について原因分析を行うことであり、また、徐坤泉が『台湾新民報』から『風月報』に転身したことで生まれた文学的交錯現象や、そこから引き起こされた小説の「場」の変化を観察することであつた。このほか、文中では、それまでの台湾文言／通俗小説で見慣れた「言情」や「冒險」ないし「探偵」といった叙事技法を徐坤泉が受け継ぎ、それを変化させたことについても分析した。徐坤泉の作品には、新文学との関連性以外に、文言／通俗小説の書写伝統から吸収したところも多い。それゆえにある意味では徐坤泉において、台湾文言／通俗小説と白話通俗小説との間の連続性と非断続性という意義がはっきりとしてくるのである。以上、本文での分析を通じ、徐坤

泉の台湾文学史上での重要な役割について明らかにし、その人物や作品から台湾漢文通俗小説の「場」が持つ複雑なもつれに

ついて、さらには小説の複数の系統間の相互交渉や意思疎通、転進の様子につき、動態的に観察した。

註

- (1) 吳舜鈞『徐坤泉研究』（東海大學歴史所碩士論文、台中、一九九四年七月、高啓進「澎湖望安小説家——徐坤泉（一九〇七—一九五四）」、『澎湖研究學術研討會論文集・第一屆』澎湖縣文化局、馬公、二〇〇二年）、一八六—二〇七頁。
- (2) 下村作次郎、黃英哲「戰前大眾文學初探（一九二七—一九四七年）」、『文藝理論與通俗文化』中研院文哲所籌備處、南港、一九九九年二月）、二四〇頁。
- (3) 李連益「日據時期長篇通俗小説の創作及主題探究——以徐坤泉、吳漫沙作品為主」（『第三屆通俗文學與雅正文學全國學術研討會』新文豐出版公司、台北、二〇〇二年）、二九—四五頁。林芳玫「臺灣三〇年代大眾婚戀小説の啓蒙論述與華語敘事——以徐坤泉、吳漫沙為例」（『台北大學中文學報』第七期、二〇〇九年九月）、二九—六六頁。
- (4) 陳慧如「在菁英與大眾之間——論徐坤泉『可愛的仇人』」の革新意識及其通俗呈現」（『育達人文社會學報』創刊號、二〇〇四年七月）、二四五—二五六頁。李友煌「迎合、抗拒與對話・參差的現代性——徐坤泉『可愛的仇人』透露的時代性意義」（『高市文獻』二〇〇四、高雄市文獻委員會、高雄、二〇〇七年一月）、一三七—一七九頁。藍士博「殖民傳統性」的進步展現——徐坤泉作品與日治時期台灣社會」（『臺灣文學評論』一〇・二、二〇一〇年四月）、八二—一〇七頁。徐意裁「現代文明的交混性格——徐坤泉及其小説研究」（成功大學碩士論文、台南、二〇〇五年）。
- (5) 張良澤「徐坤泉（阿Q之弟）作品目錄」（『臺灣學術研究會誌』第二期、一九八七年一月）、一二一—一四二頁。野間信幸「關於張文環翻譯的『可愛的仇人』」（『張文環全集』台中縣立文化中心、豐原、二〇〇二年三月）。張文環『可愛的仇人』と張文環（『天理台灣學會年報』第一二号、二〇〇三年六月）。柳書琴「事變、翻譯、殖民地暢銷小説——『可愛的仇人』日譯及其東亞話語變異」（『第八屆東亞現代中文文學國際研討會』發表論文、日本・横濱、二〇一〇年一月三—六日）、ネット上より引用（二〇一二年二月二—二日檢索）。
- (6) 柳書琴前掲論文、四頁。
- (7) 高芳郎「徐坤泉與黃得時」（『日治時期台灣文學評論集』雜誌篇）第四冊、國家台灣文學館籌備處、台南、二〇〇六年）、二八五頁。
- (8) 徐坤泉『暗礁・自序』（文帥出版社、台北、一九八八年）、五頁。
- (9) 『風月報』第四八號（一九三七年九月二日）、一頁。
- (10) 阿Q之弟「筆者的話」（『風月報』第五〇號、一九三七年一〇月六日）、三〇頁。
- (11) 『風月報』第四八號（一九三七年九月二日）、一頁。
- (12) 高芳郎前掲論文、二八五—二八六頁。
- (13) 一剛「徐坤泉先生去世」（『台北文物』三・二、一九五四年八月二〇日）、一三六頁。
- (14) 黃得時「日治時代台灣的報紙副刊——一個主

編者の回憶」『文訊』二期、一九八五年一月、六〇頁。

(15) 林衡道「徐坤泉其人其事」『臺灣風情』聯經出版社、台北、一九九六年、五二頁。

(16) 下村作次郎・黄英哲「戰前大衆文學初探（一九二七年—一九四七年）」、二四〇頁。

(17) 柳書琴前掲論文、五頁。

(18) 以下参照。阿Q之弟『可愛的仇人』（臺灣新民報社、台北、一九三五年）。曹秋圃の序にはもともととはなく、本文中の点は筆者が加えた。

(19) 以上の題辞や序は阿Q之弟『可愛的仇人』新版（前衛出版社、台北、一九九八年）には未収。

(20) 丁誦清「序」『可愛的仇人』前衛出版社、台北、一九九八年、一三一—一四頁。

(21) 徐坤泉自序に関連した記述は以下参照。阿Q之弟『可愛的仇人・自序』（前衛出版社、台北、一九九八年、二〇頁）。

(22) 本文のテーマと研究の主旨についてだが、徐坤泉を日本統治期台湾の通俗小説史の文脈とそれに関連した言語環境や創作の「場」に置いて検討したものであり、ここで筆者は「通俗小説」という語を使用した。これはその実、後の研究にて用いられた呼称である。もともと日本統治期の高芳郎（?）は「大衆小説」なる語で徐坤泉の作品を呼び、一九九〇年代に黄英哲と下村作次郎が、徐坤泉の小説を復刻出版しようと企画したときもこの呼称を用い、日本文学の文脈に従い解説を行

った。しかし、中島利郎は、日本統治期の台湾に実は大衆読者市場など全くなく、それでは日本での意味と一致しないと認識している。

筆者としては、台湾では日本統治初期から、文言から白話までの通俗的小説の初期は創作上の類型にせよ、叙述法にせよ、中国の通俗小説と近似しているものほうが実際には多いことから、本論考では日本文学の色彩を帯びた「大衆小説」の用法を最終的には放棄し、「通俗小説」の呼称を採用することとした。

しかし、本文の中で、高芳郎などの言い方を引用するがゆえに、時に「大衆小説」を持ち出したたりもした。これは論述において必要なことであった。

(23) 雞籠生「畫者的話」『可愛的仇人』前衛出版社、台北、一九九八年、二四頁。

(24) これから分かるのは、徐坤泉が言う「大衆」とは、様々な年齢層のグループを指しており、イデオロギーや階級差を持った大衆階層を含むものではないことである。したがってこれは、「左翼郷土大衆」とは異なる。『暗礁』の文体上の実践に関する情景への理解については、九、一四、二五、四三、五三、六二、六三、六四、六五、六六頁などが参考になる。

(26) 阿Q之弟『靈肉之道・自序』（前衛出版社、台北、一九九八年）、一三一—一四頁。

(27) 同上注、一四—一五頁。

(28) 阿Q之弟「筆者的話」『風月報』第五〇期、

一九三七年一月一六日、三〇頁。

(29) 徐益哉「現代文明の交混性格——徐坤泉及其小説研究」、二七頁。

(30) 林克夫「清算過去の誤謬——確立大衆化的根本問題」『臺灣文藝』第二卷第一號、一九三四年二月一八日、一八頁。

(31) 『風月報』第五〇期（一九三七年一月一六日）、頁数なし。

(32) 『風月報』第四八號（一九三七年九月二日）、一頁。

(33) 『風月報』第五〇期（一九三七年一月一六日）、頁数なし。

(34) 徐坤泉が「臺灣的藝術界為何不能向上」で述べている意見から分かるのは、徐坤泉が『風月報』と台湾新文學運動以来の『台湾新民報』や『台湾文芸聯盟』などの刊行物を結びつけていたことと、『風月報』には台湾新文學の命脈へと延長接続する意義があると認識していたことである。『風月報』第五九期（一九三八年三月一日）、頁数なし。しかし、『風月報』は半月刊、『台湾新民報』は日刊、一九三七年の漢文欄廃止によって漢文白話小説が『台湾新民報』から『風月報』に展開していく契機を徐坤泉の身にもたらしたが、結局日刊と半月刊の別のために二つの小説創作環境には依然として差が存在した。

(35) 老徐「巻頭語」『風月報』第五〇期、一九三七年一月一六日、頁数なし。

(36) 老徐「巻頭語」『風月報』第六〇期、一九三八年三月一五日、頁数なし。しかし、事実

が証明するように、謝雪漁が主宰した詩壇が始終存在していたので、徐坤泉は『風月報』の旧派勢力を根絶することはできなかった。

(37)

會婉君が『三六九小報』掲載の通俗小説を統計したところ、合計四六九篇の作品中、「言情」ものは四八篇あり、社会もの二六九篇、「神怪」もの八六篇に次ぐ多さだった。しかし、會婉君自らの分類は狭義の定義を採用しており、いわゆる「言情」小説には男女の情

愛に関わるものだけが収められ、家庭や社会の現象や問題については全て社会小説に入れられた。この二種類の内容はしばしば競合するため、もしも当時の女性の恋愛や結婚の状況を研究したければ、この両者を合わせ見るべきだと最後に指摘しておく。以下参照。

「『三六九小報』通俗小説中の女性形象——文學敘事與文化視域的探討」(政治大學國文教學碩士論文、台北、二〇〇七年六月)、一二

(38)

頁。

台湾文言／通俗小説においては、「冒險小説」という類型も出現した。詳細は以下論文参照。梁鈞釜「新世界」話語及其想像研究——以《臺灣日日新報》中の漢詩文為探討核心》(第三章「冒險、異域與新空間的再現」、中正大學臺文所碩士論文、嘉義、二〇一一年)、六三—一〇〇頁。